

令和元年度校内研究

挨拶の取り組み

～日生グループ、作業グループ、VOCAグループの実践～

富屋特別支援学校

日生グループ

～自ら気持ちのよい挨拶ができる
児童生徒を育てる～

I 研究の概要

1 目的

個々の障害の状態等を踏まえ、次のような児童生徒を育てる

- ・ 自分から挨拶をしようとすることができる
- ・ 基本的な挨拶が分かり、自分なりに挨拶ができる
- ・ 相手や場に応じた挨拶をすることができる

2 方法

各自が対象児童生徒 1 名を設定し、日常的に挨拶の指導に取り組むとともに、年に 3 回、小グループでの実践検討を行う。

- ・ 1 回目（6/11）研究の説明と対象児童生徒の決定
- ・ 2 回目（6/22）対象児童生徒への実践の検討
- ・ 3 回目（12/2）各自の実践の報告

Ⅱ 事例報告

○事例 1

視線の合いにくかったAさんが担任に視線を向けるようになった事例

○事例 2

他者に抱きつこうとするBさんが、おじぎによる挨拶もできるようになってきた事例

事例 1 視線の合いにくかったAさんが 担任に視線を向けるようになった事例

Aさん（小学部 2 年）

（1）挨拶に関する年度当初の実態

- ・ 身近な教師からの挨拶を受けて、短時間ではあるが、視線を合わせることができる。
- ・ 教師が手の平を目の前に出すことを受けて、その手に、自分の手をのせることができる。

(2) 目標

- ・身近な教師に、視線を合わせたり、自分から近付いて関わったりすることができる。

(3) 実践した取組

- ・視線を合わせてくれたときには、Aさんの目元にそっと触れ、視線が合っていることや教師がそれを嬉しく思っていることを伝える。
- ・Aさんの視線や身体の動きから、Aさんの思っていることを推測し、教師が代弁したり、思いを受け取っていることをAさんの身体に触れるなどして、Aさんに返していくことを意識して行う。

(4) 児童の変容

- ・視線が合うこと、教師と関わって笑顔になることが増えた。
- ・自分から教師に近付いて、関わろうとすることが増えた。

(5) 指導上大切だと分かったこと

- ・Aさんにとって、安心して関われる相手になることが大切である。
- ・児童の表出を丁寧に読み取って、返していくことが大切である。

事例2 他者に抱きつこうとするBさんが、 おじぎによる挨拶もできるようになってきた事例

Bさん（小学部6年）

（1）挨拶に関する年度当初の実態

- ・ 教師の促しを受け、授業の開始、終了の挨拶で「あー」という発声とともにおじぎができる。
- ・ 朝の会や帰りの会で号令を掛けることができる。

(2) 目標

- ・授業外の場合でも、おじぎでの挨拶をしようとすることができる。

(3) 実践した取組

- ・おじぎでの挨拶を学級目標にして、学級集団で取り組んだ。
- ・イラストのあるプリントなど、視覚支援を活用した。

(4) 児童の変容

- ・身体接触による挨拶もまだあるが、自らおじぎの挨拶をすることが増えた。

(5) 指導上大切だと分かったこと

- ・日常的に繰り返し取り組むことが大切である。
- ・学級集団を生かし、生活とともにする仲間と一緒に取り組むことが大切である。

まとめ

○主体的に挨拶ができるようになるためには、教師が個に丁寧に応じ、児童生徒が他者と関わるのが嬉しいと思えるような信頼関係の形成を図ることが大切であった。

○相手や場に応じた挨拶ができるようになるためには、見本となる児童生徒とともに、学級集団で継続的に取り組むことが効果的であった。